

---

# 障害者でペテンでメカニク

Mirage wolf

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

障害者でペテンでメカニック

### 【Nコード】

N9048Z

### 【作者名】

Mirage Wolf

### 【あらすじ】

その一、主人公は障害者である。右目は異常なまでの視力であるが嗅覚と味覚は無い。その二、主人公はペテン師である。交渉において重要なのは相手を騙すことであり、嘘を吐くことは人間誰でも必要なのだ。ただ、度合いが通常よりも多いだけ。その三、主人公は機械がいじくれる。葬儀社と呼ばれるその組織ではかなり珍しい上に重要である。これら総てを踏まえたのが少々外見も性格にも難有る18歳である。



## 「モノクロと眼帯 Monochrome and one eye」

鼻をつく機械燃料と油、汗の臭い。今の時代には明らかに時代錯誤的な乗り物や機械。物言わぬそれらが黒い空間で乱雑に転がっていた。

現在、2039年という時代では10年以上前より大きな技術革新が進んでおり、旧世代の機械や乗用車、バイクなどは地球環境へと及ぼす悪影響などのことから残らず廃棄されている。何処かの家屋の倉庫に眠っているものも有るのかもしれないが、それが機械特有の伸びを上げて稼働する時はおそろくないだろう。

葬儀社 GHQによる他国支配から日本解放を目指すレジスタンス集団。悪く言えばテロ組織。まだ表立っての行動は其処までではないが、隔離されている六本木でその名を知らないものは限りなく少ないだろう。ましてやその首領たる恙神<sup>つがみ</sup> 涯<sup>が</sup>という少年を知らない者はおそらく居ない。

六本木フォートにある葬儀社の拠点。元々暗いそこだが圧倒的な暗闇の空間が機械などが乱雑に転がった、此処であり、名目上は倉庫暗闇で見取りづらいがそこには異形の巨人型機械が聳え立っている。その巨人の足元では大きくは無い人影がコンクリートの床に置かれた全体三メートルほどの何かに向かって手を忙<sup>せわ</sup>しく動かしてた。

「コレは……ここで、ん？ この配線間違ってる……誰だよコレ組んだヤツ。ていうか、一回バラしたのかよ。道理でエンジンに何の問題もない割に稼働しないわけだ。有り得ねーよ」

がちやがちやと機械の内臓へと手を突っ込み血管である導線を繋げていく。度々携帯端末のディスプレイを確認しながら機械に手術を

施すその影は少年だった。

歳にして18なのだがあまり高くない背丈から幾分幼く見えてしまう。右目には事故か病気で患ったときにもらえるような白色の医療用眼帯がびつたりと付いており、右目を隠している。しかし、目を引くのはそこではなき髪色だ。ちょうど胴体を半分に分割すると右が黒、左が白というなんとも言えない奇抜な髪色をしていた。顔立ちは明らかに日本系。半分だけでもちろんのこと染めているのではなくこれも右目と同じく障害の一部であるということに気付く人間は少なくないだろう。左の白髪は茶色い機械油のようなもので所々汚れており、大きな汚れは無いが色のせいで恐ろしく目立っている。スパナやらペンチやら現在では機械が全てやってしまい必要性の薄くなってしまうた工具を慣れた手つきで操り、部品を無機質の身体へと差しこんでいく。カチリ！とプラグを組み合わせた瞬間、倉庫の巨大な扉が歪な音を立てて開いた。

「また機械弄りか……いい加減に寝る時間だ。区切りをつけて止めたらどうだ？ 漂よう」

そこまでの威力では無ければミサイルにも耐えられかつ軽量。今でこそあまり注目されていないが一昔前までの世界最硬軽量のマグネシウム合金の扉から現れ、呆れた声で呼びかけるのは長い金髪の美少年。どこか威圧するような風格とカリスマを纏った少年は実際のところ機械をいじくる少年、霧谷きりたに 漂ようよりも若いのだが年上に見えてしまう。この男こそ恙神つがみ 涯がいである。

組織の首領たる涯の呼びかけに答える声は無い。依然として漂は名指しで呼ばれるも工具左手に端末右手に機械を修理しているのだから、造っているのだから作業を続けている。完全な無視だった。

ハア、とため息。怒るでもなく呆れ。涯は何度も何度もそれこそ数



「ハイハイ、今日も騙された俺の不幸でメシウマ。他人の不幸は蜜の味ってか？」

「話を聞け。で、どうなんだ。役立つものは造れそうなのか？」

話を聞けはお互い様だろうに。

漂は心の中で毒づく。と先ほど放り投げたスパナと端末を暗闇で探し、拾い戻ると機械の身体へと再度目を向けた。涯も同じくソレへと視線を移す。

「1975年の木田技研工業製大型二輪。元のネームは『ヴァルキユリア・ルーン』。前にアメリカでの物資援助の交渉があっただろ？ あその時に廃車になってたヤツを頂いてきた」

「ほう……」

単車バイクのことなどほとんど知らない涯であったが、組織の役に立つものとなれば知っておくべきだろうと、興味深げにフレームの付いていない内臓丸出しの機械を眺めた。

今では道路を走らない二輪の機械馬は日本的なデザインではなく、アメリカから頂いたという言葉通りに旧日本が憧れたであろうアメリカンなスタイルの大型バイク。二人は乗れそうだ。

「中のプラグやら配線やらが少しイカレてたからつけ直して、つい

でにフレームはエンドレイヴの装甲を使うつもりだ」

「成程。だから皆にエンドレイヴの破片を集めさせていたのか。それは強化のためか？」

「That's Lighthouseだ、……っ」と

英語で涯に答えると機械の内部から手を離して直ぐ隣に置いてあった薄い青色の板を取る。スパンも工具箱へと戻し、代わりに人をぶっ叩けば気絶くらいはしそうな大きさのドライバーを取り出してフレームをボディへとはめこみながらこれまた大きい螺子で締めつけていく。その様子を涯は無言でただ見つめている。普段なら涯は直ぐ去るためにあまり気にならない漂だが、組織のためとはいえ作業を凝視されると集中力が途切れる。というか、涯の存在感が有り過ぎて背後に居ると物凄く気になるのだ。

……もしかして、寝るまで居座るつもりか？

端末に表示される時刻は……午前三時。

「げえ……もう朝になるじゃんか」

「だから言っただろう。二度目だがいい加減に寝ろ。俺も寝る」

踵を返すと涯は入ってきた扉へと向かいポケットに手を突っ込みながらヒラヒラと手を振って少しだけ灯の付いた道へと消え去った。

よく考えれば夕飯も摂っていない気がする。じゃなくて摂って無い  
……  
味覚、嗅覚は無くても腹は空くし、もちろんのこと栄養失調にもな  
って死ぬ。ただの障害者であって耐久力は普通の人間なのだ。

「……明日の朝は久しぶりに米かな」

ポケットに入った携帯食料の入ったビニールを取り出すと、一瞥し  
てから戻し大きく欠伸してから倉庫を去った。重くも軽くないマグ  
ネシウム合金の扉をきちんと閉めてから。

「モノクロと眼帯 Monochrome and one eye」(後書き)

畜生……綾瀬が可愛すぎるのが悪いんだからなッ!! いのりも好きですが…ダメだ…集さんの嫁と化している……。

ということと更新する際は綾瀬へのアレが爆発している時と云うことになります。(どうということだ!?)

ついでにバイクの名前は架空のモノですが「バルキリールン」というバイクはホンダから本当に出ています。

「美術の女神 Euterpe」

廃墟の教会。僅かに残ったステンドグラスを通して差す光が暗闇の空間を照らしている中で少女は唄っていた。

肢体に黒い翼を衣服のように纏った少女の周囲では烏カラスのような漆黒の羽根がはらり、はらりと舞い落ちる雪のように地へと降り注ぐ。その少し離れた所には牛の頭蓋を仮面のように被った長身の人間が輝きのない瞳で虚空を見つめていた。それはどこか少女を冥府へと連れ去る死神のようにも見える。

「……………」

唄う桃色の髪の少女、襟ゆざしいのりは尚歌い続ける。誰のために唄っているのかすら解らない。ただ、彼女の歌声に癒される人間は大勢いる。これから配信されるであろう映像を心待ちにしている人は十代半ばを中心にして数えきれぬ物ではない。

（少々音量調節が必要か？　だが、そこまではないし、これ以上調節したら逆効果かもしれないな）

廃墟と化した教会内でヘッドホンをした漂うよは右手で片側の耳を押さえて廃墟に幾つも設置されたマイク越しに伝わるいのりの歌声へと

集中する。漂の目の前には数々のスイッチやボタンが計五十以上も配置された物々しい機材が有る。その直ぐ隣には唄い手を正面から凝視するカメラの映像を映した小型ノートPCが駆動しており、空いている左腕でキーボードをカタタタタとタイプする音が響くくらいに高速で叩いていた。眼前のいのりと歌声へと集中している漂はPCのディスプレイなど見てはいないが正確な文字の羅列が画面の端へと表示される。

それは歌詞だった。目の前で唄う少女の紡ぐ言葉という感情を全て黒字として正確無比に打ち込んでいく。その唄の名は E u t e r p e  
エウテルペ。

その名はギリシア神話の美術の女神と同じくし、「喜ばしい女性」という意味を冠する。

既に文化的に知っている人間も少ないかもしれないが、その名前タイトルはいのりとよく合っていると思った。普段無表情だが唄っている時の彼女は感情を声へと乗せているような気がする。あくまで気がするだけだが。

今のところ修正する点はない。既に唄もフィナーレへと向かっている。頃合いか、と置いておいた無糖炭酸水クラブソーダに一口つけ、漂はノートPCへと繋いでいた四脚型ロボット、正式にはオートインセクト『ふゅーねる』なのだが重要なのはそこではない。漂はその頭部を掴み目の前の機材へと置いた。

「ふゅーねる、ツグミと繋いでくれ」

『何よ。いのりんがどうかしたの?』

声をかけてから約一拍置いてから声が耳をパタパタとさせたふゆー  
ねるから響く。まだ幼い少女の声で実際に漂とは四つも歳が離れて  
いる。にも拘らずタメ口なのは性格というか、まあ気にしたら負け  
だ。

「ねーよ、こっちは何の問題もない。ただ、ネットの状況だ。もし  
かしたら動画を発信した時に探知される恐れもあるからな。で、如  
何<sup>かが</sup>？」

『ちょっと待って………今のところこちらを監視するような怪しい  
奴らは居ないわよ』

「オーケー。ちょうど終わった。編集はしておくから配信頼む」

「了解<sup>アイン</sup>」

通信が終わる。用の無くなったふゆーねるを元の場所へと戻し、顔  
を上げると床に座り込んだまま漂を見つめるいのりの姿が有った。  
一瞬、きよとんとするが口元に笑みを浮かべてぱんぱんと右掌  
で左掌を叩いて称賛した。それからヘッドホンを外してクラブソー  
ダのボトル片手にいのりへと近づいた。

「お疲れさん。特に問題は無かったし、個人的にはもっと聴いてい  
たかったな」

「……ありがとう。ヨウも機械のお仕事お疲れ様」

「いえいえ、どうも。こちらさんとしてはアイドルのお褒めの言葉が頂けるといふ至極歡喜極まりないものでして。これが生きがいと言っても過言ではございませんよ」

まるで育ちのいい人間のように右腕を大きく振り上げてから脚を滑らせて甲斐甲斐しく礼をする。声色と顔だけ見ていればそれなりに決まったのかもしれないが、薄汚れた群青の作業服と腰に巻きつけた葬儀社の証たる黒いジャケットをまるでスカートののように腰に巻きつけているさまではなんとも言い難かった。いのりも不思議な表情をするだけで何も言わない。シユールな光景だった。

「予測していたがここまで反応無しとは……中々くるものが有る。あ、骨の人…じゃなかった。四分儀のおっさんもお疲れさん」

「私はまだ27です。おっさんと呼ばれるには聊ちやうどか早い気がしますか？ 霧谷」

「そいつはどうもすいませんでしたー」

棒読みの漂に対してため息を吐くのは牛の頭蓋を被った男性。レプ

リ力であるそれを外して晒した長い銀髪、容姿は若いとは言えないかもしれないが瞳には冷えているようにも燃えているようにも見えた。

四分儀は眼鏡を懐から取り出すとそれを掛けてから改めて漂を睨んだ。その後、踵を返して漂と祈りから離れていく。

「それではお二人とも、くれぐれも招集には遅れないように。特に霧谷は」

「りょーかい。今日は大切な日だってことくらいは覚えてるさ。そんな日に遅れるなんてことはねーよ」

「そうですか、と四分儀。明らかに信用していない眼をちらりと覗かせて廃教会から去って行った。

くそう、今日は絶対に遅刻しない。そう心に決めるも漂の心中は様々なことで一杯だった。

ふゆーねるに次はどんな機能を追加しようか……いつそ弾丸でも飛び出すようにしておくか？ 一秒間に13発くらいの連射可能で尚且つ装填段数は100発ほど。いやいや、それでは少々派手さに欠けるか。ここは思い切ってノーマルグレネ ドとスタングレネ ドを二つずつ仕込んでからグレネ ドランチャーの機構を応用して発射するなんてどうかな？ しかしもしも内部爆発したら使用者が死ぬ可能性も無きにしも非ずだし、何よりも我が子が木端微塵になつて壊れるのは辛い。どうしようか……

様々な妄想を膨らませながら葬儀社の団員へと機材の片づけを支持して帰るか、と思いき出そうとした瞬間 腕をきつく握られた。銃を撃つてマメの出来た男の掌ではない。繊細で柔らかいな

がらも弱々しさを感じさせない戦場に立ったことのある少女の掌だった。

「……いのり。まさか帰りたくないとか、俺とそんなシチュエーションを期待しているわけじゃあねーよな？」

「?……ヨウはすぐに機械と遊ぶ。だから今日は倉庫に寄らせないで一緒に帰る」

「ちょ、マジで!？ 俺って倉庫に行けなかったら存在理由ないじゃない!？」

「ううん、そんなことない。ヨウは強いし、頭もいい。何よりも私のプロデューサーでマネージャー」

「…そいつはどうも。申し訳無いがそんな役割はすっかりと忘れていたようだ」

そついや涯のヤツに言われてたなア……機械関係の仕事だと直ぐに本台を忘れてしまう。

腰に巻いていた黒い葬儀社ジャケットを露出の高い衣装のてしかないのりの肩へと掛け、満足したようないのりに引っ張られながら漂は葬儀社のアジトへと歩を進めた。

レジスタンス組織である葬儀社の拠点、六本木フォートの地下には円柱型の空間が有る。

階層にして三層の空間は葬儀社で言ういわば司令部。作戦の案を指導者が団員に伝える場なのだ。円形の階層に集まる団員は全て下を向き指導者たる存在の言葉を聞く。指導者と言うのはいわば人の上に立つ存在、王がそうであるように本来高き場所へと有る筈の玉座や司令官の座する椅子などはなく、最下層が首領たる恙神 涯と参謀である四分儀がその地に立ち演説する場所となっている。

「 皆、揃っているな。では、これより作戦内容を説明する」

周囲を一通り見回した後、涯は高らかに声を上げた。逃げられないようにいのりが漂の腕を掴んでいたところを見た瞬間に鼻で笑った

のは気のせいではないだろう。

「諸君、この作戦は我々にとって開戦の号砲となる。つまりはGHQに対する我々の応報だ。その始めとして24区のセフィラゲノミクス研究施設へと侵入し、完成した遺伝子兵器を奪取することそれがこの作戦における最終目的だ」

涯がモニター下の機械を操作し、巨大化させたディスプレイに作戦内容を映す。モニターからその内容を理解した者たちが騒ぎ出す。歓喜、不安、恐れ。様々な”感情の形”が漂の瞳には写っていた。皆がざわめく中で声を一言も発さない漂といのり。その方向へと一瞬、涯が瞳を向けた。

「静粛に。高揚する気持ちは解るが、今は作戦内容を聞いてほしい。

さて、この作戦だが侵入、及び遺伝子兵器奪取には

いのり、お前一人でやってもらう」

涯の視線が再度いのりへと向かう。まあ、妥当だろう。ハッ、声を上げ漂は円形の階層全てを見渡す。

通常ならこの中の一人くらい「女の子を戦わせるなんてダメだ！」なんていう偽善者が居るものだが生憎と葬儀社はそこまで下手な人材を入れていなかったらしくそんな意見を出す存在は誰一人としていない。むしろ皆適任だと考えていることだろう。何せいのりの身体能力は皆把握している。

「主な支援は綾瀬のジユモウ。それと霧谷 漂に行ってもらう」

エンドレイヴを操る綾瀬のところでは何のざわめきも起きなかったが、『霧谷 漂』という名が涯の口から飛び出した瞬間に再度ざわめきが起こった。一部の人間除いては「霧谷つて誰だ」という声が主に囁かれている。それを予測していたのだろう、涯は漂へと視線を向けながら頭上で掌を叩いてざわつきを抑えた。

「一部メンバーは知っているだろうが、一応知らない者も多いようだ。紹介しておこう、つい最近までアメリカの企業に対する支援物資交渉のために一人国外へと飛んでいた整備兵<sup>メカニック</sup>、そいつが霧谷 漂だ」

涯が指差すと二階に居た漂へと視線が集まる。やはり眼帯にモノクロの髪色というのは目立つようで奇異な物を見る視線も多々感じたが特に気にしてなどいなかった。涯はそれからエンドレイヴ『ジユモウ』の修理はアイツが主にやっている、とか機械全般の開発や修理はアイツが全て請け負っているなど詳しく紹介し始めたが、何故整備兵が全線での支援なのか理解していない者は多数いた。

「不満のある者も居るようだが、そいつの実力は折り紙つきだ。私が保証する。漂<sup>よう</sup>、手加減なんてつまらないことなどするなよ。実力を団員へと示せ」

「悪いけど目指してるモンが同じな以上手加減なんてするほど甘ぢ

やんな脳みそじゃねーよ。ノルマは達成するぞ」

「……ふっ、その意気だ」

漂を一瞥すると涯は再び正面に向き直って高らかに声を上げた。

「皆の健闘を祈る。」

解散！」

「美術の女神 Euterpe」(後書き)

歌詞は掲載できないんですよ……中々辛いモノが有ります。  
というわけで爆発したので更新です。  
感想など頂けたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9048z/>

---

障害者でペテンでメカニック

2011年12月29日09時45分発行